

ある日、家にもつがとどきました。大きなダンボールが二つ。開けて見ると、お兄ちゃんとわたしの新しい自てん車のヘルメットでした。お兄ちゃんは黒、わたしは少しはでなピンク色のヘルメットです。

「ヘルメットするのやだな。なんでヘルメットなんてせんといけんの。」
わたしは、お母さんに聞きました。

「そうじゃね。大事なことやから、ゆっくり話そうや。」

お母さんは、わたしに言いました。そこでわたしは、お母さんといっしょに自てん車のヘルメットについて考えました。

わたしは、道路で自てん車にのっている人を、たくさん見かけます。けれど、ヘルメットをかぶっている人は、少ないと思います。

「みんなヘルメットなんてしとらんよ。」

わたしは、お母さんに言いました。すると、お母さんは、
「自てん車のじこでは、なくなった人の約六割が頭部にケガをしているみたい。」

と、教えてくれました。それを聞いてわたしは、もしじこにあった時、きちんとヘルメットをかぶっていたら、いのちが助かるかもしれない、と思いました。ヘルメットは、自てん車にのる人のいのちを守る大事な道具だと思いました。

二〇二三年四月一日から自てん車にのる全ての人はヘルメットの着用がどりよくぎむかされたそうです。『どりよくぎむ』という言葉がむずかしいのでお母さんと調べたら、ヘルメットをかぶるように、つとめることだそうです。わたしは、自てん車にのる人みんなにヘルメットをかぶってほしいです。そして、悲しいじこが少しでもへってほしいです。

さいしよは、ヘルメットをかぶるのは、いやだったけど、今はそう思いません。ヘルメットは、わたしを守ってくれる心強い味方です。自てん車は、わたしのような子どもでもかんとんにのれるのりものです。だからこそ大切ないのちを守るために、できることはやったほうがいいと思います。交通规则をまもってヘルメットをかぶって楽しく自てん車にのりたいです。